



誦諧

蕉門句撰

上

~ 5
4123
1



五割八門
號 4123
卷 1-2

序

わいのねをわらわらとわらわら
生れこころをわらわらとわらわら
心の中をわらわらとわらわら
御前よりわらわらとわらわら
わらわらとわらわらとわらわら

大正十一年一月十日
佐藤忠三郎
印

序

人指のさへかきあつては
 くらゐのさへもあつては
 せいのさへもあつては
 東郷ちのさへもあつては
 左様といふさへもあつては
 口付のさへもあつては

梅のさへもあつては
 咲のさへもあつては
 蝶のさへもあつては
 屏風絵のさへもあつては
 けのさへもあつては
 一具のさへもあつては

少冊とさあぬありは六乃
あつりたる松の下陰ふ影とありく
世ふゆきとほくさふ写視のつゆ
とりのちわつあつありきま

多代女

松窓翁生涯所咏。凡二千餘什。
今之所抄者。僅七百餘。翁好遊
歷。奥羽二州。来往無虛日。其在
松前函館。通前後殆七八年。所
得最多。偶有涉京畿者。多是想
像寄興。總集羈旅之作。十居五

六。今多略之。將待他日別編其遺也。

一具愚春識



誹諧蕉門句撰上

春の部

一具菴一具
蕉甫亭古翠
輯

睡月回のあるとし

えおの石ニゆゑのらん〜ゆ〜
年とやさし〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜
まゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜
江戸よりゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜
旅のゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜



松よりうしろの松の葉の影
 雲よりうしろの雲の影
 その影もまた光の影
 春の影もまた秋の影
 西の空を渡る雲の影
 初夢の影もまた醒めの影
 清浄の影もまた塵の影
 神々の影もまた人の影
 何れも影の影の影

屏の影もまた人の影の影

日映萬年枝

松の影もまた人の影の影
 百丈此の影の影の影
 江戸の影もまた人の影の影
 眺望
 雲の影もまた人の影の影
 母の影もまた人の影の影
 小舟の影もまた人の影の影

あつしはあつし

梅さしけハ葉の美梅とて夕日か
日のうれぬものかきく梅を
物さしぬ梅のゆきをいふ

葉肥う強うげるあつし

あつしの葉

あつしき叶のあつしあつし
かきく梅の月の梅さし梅を
あつしあつしあつしあつし梅を

老唄

梅さしけハ葉の美梅とて夕日か
日のうれぬものかきく梅を
物さしぬ梅のゆきをいふ

葉肥う強うげるあつし

あつしの葉

あつしき叶のあつしあつし

かきく梅の月の梅さし梅を

あつしあつしあつしあつし梅を

鬼貫や井戸のささぬる梅を
あしほろ梅福をささぬ梅を

如月二十七日菅野法宗

きのよえしあしほろ梅乃を
今朝梅をささぬ梅を
るなすしをささぬ梅を
まもまもささぬ梅を
梅の中よりささぬ梅を

十日ほど梅をささぬ梅を
七葉の梅をささぬ梅を
青柳をささぬ梅を
西月の梅をささぬ梅を
如桂 鬼門梅をささぬ梅を
月をささぬ梅を
梅をささぬ梅を
梅をささぬ梅を
梅をささぬ梅を

まじや 田つ〜〜〜ま〜〜〜すあ
ま 古 糖〜 糖 付ん 夕 糖
〜〜〜あ の 和 糖 うつゝ 糖 糖

暹 抽

まじや 糖 の さ げ〜 糖 あり〜
まじや 糖〜 糖 糖〜 糖
まじや 糖〜 糖 小 糖 の あ 中 糖 風
〜〜〜まじや 糖 の 糖 を 糖 糖 糖
ち〜 糖 の 片 糖 糖 糖 糖 糖 糖

糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖
糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖
糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖
糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖

途 中

糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖
糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖
糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖
糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖

糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖 糖

またぬ海ふゆ〜

あゝ〜

ゆゑともはれ〜
りすも海若紫多〜
海若紫もゆ〜
の〜波ハ路す〜

海舟

あゝ〜
また〜

あゝ〜
また〜
あゝ〜
あゝ〜

あゝ〜
あゝ〜
あゝ〜

雲のふりかへるをよみてとて
 暮のあけぬもあけぬ夕の光
 雲の戸や飛んてあつてとてあつて
 かよふ心日やあつてあつてあつて
 雲のふりかへるをよみてとて
 暮のあけぬもあけぬ夕の光
 雲の戸や飛んてあつてとてあつて
 かよふ心日やあつてあつてあつて

暮のあけぬもあけぬ夕の光
 雲のふりかへるをよみてとて
 暮のあけぬもあけぬ夕の光

若思院

法法まの持もとてあつてあつて
 暮のあけぬもあけぬ夕の光
 雲のふりかへるをよみてとて
 暮のあけぬもあけぬ夕の光

ちるのいふとちかたれとを信れらる
 らるる千一載しきまうし喜丸の
 明るより着るおのやんぬれは
 ちるるるるるるるるるる
 鳥物子さくか川 幾は白き
 隣うらあむくやさるるるる
 聖のちるる満月 さるる喜丸
 ちるるるるるるるるるるるる
 信誓の世々のうらんじ

地ゆる年ぬのしちるるる

とくくとめのみささるるるるる
 春のねや秋の磨斗と地ゆるるる
 まるる秋の山あうるる 隠巖寺
 砂川子と臨るるるるるるるる
 伊勢おがささ七夜何るるの
 来字の来れらるる同一園の
 人うら乞せらるる

まよふ日比非代工仔細る看こつと本
磨きしむきも取く門とそ日のまよふ
心と身と田と舟あつり中さち
涙つとそとゆうし蒸姑も何乃玉
髪ふ髪押ひひきまよふうとあれし

去冬の秋もこのあつしれぬとよ
あつとく七夕やひらふて三座す
髪う梳とつひらふ髪とまよふと
又その初あつとつと

髪うま揃の程の程とありふれし
あつとくふはまよふとやまよふ乃宿
髪うしあれハまよふし七三座
高う起く掛りうやまよふとまよふ
鶴匠とくすまよふとく男猫代
古筆風の小柄もうとまよふと
四月や志まよふとあれを神の内
二月のあつと三月月う
四月や起まられしとあつと

や月の梅えりーねより 種乃月

雀老人の予とまゝとく馬鹿虎を

とくくちむぬきま海女の目と

ろいつまぬきす杖を就のことく

そのまむむちたひくく和の舞

ふかふかもさすふらふら

二月どのうーまやうー老二人

又嬉しー二日あつと色ーま

あふちふあふちふとらぬ

ねき 夜とく忘るねれ中のまゝとく

飯粒もまきまきふりり 凡中

凡中まきくつえくつえく 山乃君

凡中の屋ふ髭なあれー部舞くね

乙のまは生まれはとれくま ね月

かえあへまきまき 拾いのめ法もま月

まきまきまき 葛屋のまきまきの月

ま 嘯く鼻くむまきの月 ね月

接し穂しとあふけし 酒もあきあきり

あはれの地をうらへけしはきと穂時

はら若なきと稲と張る殿を記て

山木より川はとやうり流るる夏の

うらや

さあやもむさくあつり六のりこ

捨ひるやや草のむ乃夕のり

葉のふれ中やふあ持柳る秋

痛く英や一月ふさやる茎とと

あはく中川とさうりこ

あくささや草むあつめく梅あや

小多等う餌もさけえ芽む系

酒折る十日も地さく一植る葉

芦の芽み折つやてや花ぬ子多

あはれの地をうらへけしはきと穂時

あはれの地をうらへけしはきと穂時

あはれの地をうらへけしはきと穂時

あはれの地をうらへけしはきと穂時

あはれの地をうらへけしはきと穂時

上

あやうし新里片倉氏乃

ふせむし

待ハキミキミヨのむを松乃風
尋の目ハ多クふりきし能事
江の虫ヤ物ぬうちまア乃との

琵琶湖ふ野す

月のある朝と夕めをくアのり
アふけもまを名をさ古郡

小田小降るるもゆく小鴨

花もや露のうらを海舞系
るを味を花の香はたくなる
露若乃白のうらをく性
麻の程之粒持くもきく性
海若乃小嵐をすまふあく性
親の母やもるるものうらをく性
ま生をまもるも修めく性
色もくもあつるも折也白い紙
むてくもまもるるれ

飯棚の飯より多し一拵の事
 廣大かこころは遠き事浮葉像
 浮葉像の事ゆく弱くえゆる
 蝶の事ゆはぬ日う先きよある
 雛の事言ふ事ありをたされる
 此の西乃 枕お折ぬ江の事
 このおわたりあたるもの事
 此の事ゆく梅をたふす
 春をこころ結つて

あつちの事とさるもの事
 あつちの事とさるもの事

能くも枕又一しは雛乃と

上 聖

ちひみら〜あれの事とら〜う
 うり〜と〜を 雛〜と〜梅〜と〜
 ろ〜ぬ〜事〜あ〜り〜と〜
 志〜や〜と〜と〜の二人拵
 準 雛〜と〜と〜と〜と〜

はし〜〜

きんりのき〜きんり乃おるう那
おまや〜〜

まを

おのまよ〜〜
あよと〜
ふ〜
〜
まの松と〜

何おの〜
おの〜

途中

〜
あま〜
〜
〜
〜

作後居目〜

酒くらを董乃あまふ乃草

似埤賢

未人の目も董うあまふ一板

毫をわく一り終

入るハ入るのあまふのあまふ

小つてあまふのあまふ一板

垣根田の蘭も刈あまふのあまふ

あまふのあまふ

あまふのあまふのあまふ

江戸あまふ

あまふのあまふのあまふ

あまふのあまふのあまふ

夏の部

あまふ根はうぬねをものあまふ

人中へ終りさうあまふ

途中

あまふあまふのあまふ 後時

上

祐若くし集りぬるこ又使

江戸のありき

法仙の生れしきやふ二のふ
る後んを強ふえく久し細を

法をききて花のよさを惜く

一重花後所のすまじき一重花

臺のふれしきめくそくむりしき

新かき

ふ二船まむきくこ田しりし

文書さむ経なき書巻のうらま
 経教の満月かゝる松山のうら
 ちししをる傳持ししし
 酒田さき世のそまあり
 よる波の砂ふ溜りく松籠し
 ちしし松や山の岬ししあき
 経教を病むや牡丹のむのし
 ちしし松すまじき牡丹うらま
 物のそきさきし松し牡丹教し

村もやあはれあはれいゝのふぶ川をさ
 西なる乃あはれいゝあはれいゝ
 をいゝあはれいゝあはれいゝのささくぬ
 田界もやあはれいゝあはれいゝあはれいゝ
 作もよあはれいゝあはれいゝあはれいゝ
 けいゝあはれいゝあはれいゝあはれいゝ
 松をさあはれいゝあはれいゝあはれいゝ
 穂もあはれいゝあはれいゝあはれいゝ

た田系をささく

旅もあはれいゝあはれいゝあはれいゝ
 山もあはれいゝあはれいゝあはれいゝ
 穂もあはれいゝあはれいゝあはれいゝ
 知もあはれいゝあはれいゝあはれいゝ
 郊もあはれいゝあはれいゝあはれいゝ
 書もあはれいゝあはれいゝあはれいゝ
 花もあはれいゝあはれいゝあはれいゝ
 鳥もあはれいゝあはれいゝあはれいゝ

二十八年を去るる岩地

しるる岩地

かよふりやふ雲とあつて昔えー
橋のつちおとくさよよ世のうら
きと終ふ木の太ふある後よあか

松をうらりし岩地は海を去

はしよふのうらさく

松をうらりし岩地は海を去

あぬのゆきし葉あつて

松のうらりし岩地は海を去

長閑な岩地は海を去

秋しより予うら尾を去ぬの

あつての中やうらりし岩地の

あつての中やうらりし岩地の

あつての中やうらりし岩地の

あつての中やうらりし岩地の

あつての中やうらりし岩地の

あつての中やうらりし岩地の

上

時を鳴あしきわれ釣乃糸
ふ二なる所や釣の軍古鳥
鳥をえそくあせハあそかんを
妻のある隠共ありはぬ鳥子鳥

邊郷

雪の老ふらゝる老も形一
か川の田植そく鳥よ鳴み鶴
み鶴あげみをききくしこ
そゆを井のうねあしき鳴み鶴

しこをききききききき

名ありといふたたりた

流泉捨てしけれハ草のわさうた
ほろろや花うさ乃竹のうけ
山の鶴はあしきもあけうた
わさうたや花捨うりこる昔の井
鬼灯のあしきもあしき
松をうた降る名の家路のあし
たうしをあしきききき

片をふりふらふは戸も 苗のうらち
わがらの心持をよしのふらふ

代りきりよくしるきよ月 影ふ

舞の泡鬼のやーきとひと

業師おふあしぬきをよしのふらふ

あらしさぬや 仕舞のほろぬきのは

字のゆもやぬらん地をうく ぬき乃お

蛸満寺

苔のうらちあふもあらしぬき根を

ろくげくぬきくしるき 若乃を

うらちぬきぬきのあふもあらしぬき

かゝるぬきのさる輝と ちかく 雀

簾ふあつくと 朴のあらしぬき

改のうらちあふもあらしぬき

車とのふこほろきよ 後のうら

雄猪啼を越る時

あふもあらしぬきぬきのあらしぬき

あらしぬきのあふもあらしぬき

山の井ふあきさのころき夏月
山人ま山ま刈るやあひの月
六月鈴は種まき真

ふふのきく氷るるを新 新
氷入年家日たまありのりま

らん不遅のねとま佛やあひの
眼と耳とたまあひあまをるえ

小法師

あてしことろねえしを佛のま

余のまのまあひあひのま

本まうゆまぬの一まのま

中法師

そ親ふそのまときし合飲や笑
あつまけもあつまねね入暮ころま
まのまあつまのまあつまのま

山のまのまといふ和歌歌をね

山本推つる日ままままま

山本推つる日ままままま

葉一葉うくや枝一葉そのく敷
 蓮の糸葉乃其くしあうあうり
 六田はあふ田の後のそあはく
 庵とてはあふあふ葉のさうあうら
 ふさそと押入新なり麻の葉
 海川やうとさきとえくぬる
 二人の縁とてあふくはあふあふ
 所をく様ふくはあふあふ
 所の皮下あふあふくはあふあふ

雨のさふ所のあふあふそれあう
 廿二のあふあふあふあふあふ
 葉を葉とてあふあふあふあふ
 葉とあふあふあふあふあふ
 葉とあふあふあふあふあふ
 葉とあふあふあふあふあふ
 葉とあふあふあふあふあふ

百合花は山崎ゆきと折もあや
 新のちよんていやくせいの清くは
 村中此鏡らひよとくくく
 あつふふちの清くあつふふ
 こまごま娘を嫁あつふふ
 仰り家刀自公福ふあつふふ
 酒田より社田の清くゆく
 昔と屋ふ折外くくく
 こつる夕海をうあつふふ

あつふふくく

老うあつふふくく

久保田の折あつふふ

あつふふくく

中あつふふくく

あつふふくく

あつふふくく

あつふふ

あつふふくく

暮れにうらみあふるも 異人の心
 故の葉を引さくく 風吹くや
 さひきつゝ 鏡のあけし 砂のこ
 中をゆく 類はあふるの中
 夕暮の月さりの空
 葉をさす 障りあふるも 暮るを
 風吹くも 暮るや 鞠場の暮れ 経仕
 腔をくわく 暮る一人の 風吹くも

新字回

ハ大鏡五すゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 瑞くくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 途中 強さを仰ぐ

夕考亭

夕暮の月さりの空
 夕暮の月さりの空
 夕暮の月さりの空
 夕暮の月さりの空
 夕暮の月さりの空

井ふさるす硯もやうとまのり
ゆゑとまのりゆゑとまのり
ゆゑとまのりゆゑとまのり
ゆゑとまのりゆゑとまのり

まろ

あといふさつ掃らるるよ月をえゆ

菰句集上 終

